

### III 草書派の移植

#### 1. はじめに

未経験の文化である速記の実用化を急いだこともあって、田鎖綱紀は日本語の書字伝統を十分に考慮しないまま、欧米の幾何派理論を受け入れた。それに対して、ドイツの書字伝統に着目する研究者がいた。

帝国議会第一議会の記録方法に関して欧米における速記を調査する過程において、早くからドイツに草書派の手書き速記があることは知られていた。田鎖も草書派の存在を承知していたが、国語速記実用化の立役者となった若林珪蔵が、ドイツ草書派の理論を採り入れようと試みたことが伝えられている。

一方、豊後佐伯藩最後の藩主、毛利高範（1867. 1. 10—1939. 11. 5）は、田鎖の第1回講習会を受講して速記に強い関心を持っていたが、ドイツ留学中に、草書派の日本語速記法の創案と普及を終生の使命とすることを決意した。

#### 2. 毛利高範の立案方針と理論

ドイツの大学の講義で教授も学生も速記でノートをとっている状況を見て、毛利は草書派による日本語速記法の開発を決意した。毛利が手本に選んだのは、オーストリアのファ



ウルマン Karl Faulmann がガベルスベルガー式を学んだのち改良して成立したファウルマン式であった。ファウルマンは草書派の祖、ガベルスベルガー式と最新理論のシュトルツェ式を統合しようとしたが、ガベルスベルガー、シュトルツェの同意が得られず、私案をファウルマン式として 1875 年に公表し、最終版は 1883 年に出た。ファウルマンの戦略は両式の母音表記法を標準化して長所を統合し、欠点を除こうという、今日のドイツ統一方式（DEK）へつながるものであった。

図 2-44 毛利高範

帝国議会が始まり、貴族院議員となった毛利は、音声学に基づいて日本語の速記方式を体系化することが重要だと考えて研究方針を立てた。ドイツ草書派では、基礎符号に画線要素を用いて音声を音素単位としてとらえ、子音と母音をローマ字式に続けて書くことを前提とした。そのために図 2-45 の符号源図に基づいて、音声学からの科学的な評価によって基礎音にラテン文字の一部分を割り当てるとし、頻度が高い音にはなるべく書きやすい線を配当することとした。毛利が感じた速記研究の魅力は、ラテン文字の書字運動に基づいた書線を日本語において用いる点にあった。

草書派の起点となるガベルスベルガー式においては図 2-46 のように、ドイツ語におけるラテン文字の筆跡の特徴をもとに基礎符号が設計されており、英文速記と様相が異なる。例えば幾何派で多用する直線の直立体、水平の直線を避ける反面、角度 75 度の画線を上から下へ、あるいは下から上へ筆記する符号が実に 23 種あり、次いで水平に筆記する符号が 11 種、右下へ向かう 45 度は 2 種の符形に 7 符号、下から上へ 15 度で上がる直線では 4 符号を

設定している。

### 草書派



毛利式 1927

図 2-45 毛利式の符号の源図

毛利はファウルマン式を手本にして、線の配分は子音と母音で分け、子音には下方へ向かう線を用い、母音には上方や右へ向かう線を配分することとした。

ドイツ流の速記字体を取り入れるために、斜線は下方の先端を(1)左方つまり前方へ曲げるもの、(2)

鋭く止めるもの、(3)右方つまり後ろに曲げる3種とし、また上部の先端部分でも(1)前のほうから曲げるもの、(2)鋭く書き始めるもの、(3)後ろから曲げるものの3種とした。

子音の符号はすべて淡線を用いたのに比べ、先行した日本語方式にならって、毛利式では清音を淡線とし、濁音に濃線を使用した。

幾何派の基礎符号は見た目がシンプルで、筆記時間が短いと思われる。それに比して、草書派の基礎符号は、それ自体は書きやすいが、図形としては幾何派に比べて筆記時間がかかり、音節当たりの筆画数が多くなるのが課題



図 2-46 草書派ガベルスベルガー式の画線体系

であった。

そこで、毛利は子音の略韻法、子音の略音法を取り入れ、ドイツ草書派のように綴り字の筆記線量を減少させる方法を設けて、高速度にたえる速記線を実現することに成功した。それは幾何派方式が略字、略符を設けて筆記線量を減らす高速度化を進めたのに対して、毛利式では音を省くのではなく、音韻を暗に示す表象的な全音記法を組み立てた。この音表象理論のアイデアは幾何派でも、アメリカのクロス式に導入され、森卓明の超中根式に導入されて表象法へと完成されていくことになる。

近代速記法の表音主義に立つ毛利は、幾何派と同様に、日本語の音声学に基づいて基礎音を類型にまとめるとともに、清音と濁音の関係でも「類音類線」の原則を採用した。

幾何派は基礎符号の単純化が進むと、続け書き時に崩れやすくなって運筆の改善が問題であったが、逆に動態符号を重視した草書派では、多い画数で担う音声量をさらにふやすことが課題となった。それ以上に、ドイツ語と日本語は言語特徴が違い、また文字、符号の書

きやすさの価値観が異なり、さらによく用いられる音列が同種でないためドイツ語速記理論を日本語へそのまま移植することは困難を伴った。図 2-47 は、毛利式と手本にされたファウルマン式の基礎符号である。

毛利は日本語の基礎符号の画数を減らすため「略韻法」をつくり、母音を書かずに音節をあらわす着想をした。これは同画倍音の効果を実現するもので、例えば「加賀」(かが)という言葉を送記符号で綴る場合、/ka/+/g/と書いて末尾の母音/a/を省き、/kaga/を表象した。

毛利の略韻法では、音声学に基づいて母音を発音する際の開口の広さ、狭さと、舌の位置の高中低に応じて速記符号の種類を「一階」(First floor)と、「二階」(Second floor)に置く2種とし、さらに線條に濃淡の違いをつけて、符号を置いた3つの段で母音を表すという母音表象規則を組み立てた。

	ア イ ウ エ オ	カ キ ク ケ コ	サ シ ス セ ソ	タ チ ツ テ ト
<b>A</b> 毛利式 1919				
	A I U E O	KA KI KU KE KO	SA SHI SU SE SO	TA CHI TSU TE TO
<b>B</b> Faulmann 1883				

	ナ ニ ヌ ネ ノ	ハ ヒ フ ヘ ホ	マ ミ ム メ モ	ヤ ユ ヨ	ラ リ ル レ ロ	ワ
<b>A</b>						
	NA NI NU NE NO	HA HI FU HE HO	MA MI MU ME MO	YA YU YO	RA RI RU RE RO	WA
<b>B</b>						

(毛利式速記法詳解 1927 Art und Bau der wichtigsten Kurzschrift 1988)

図 2-47 毛利式とファウルマン式の基礎符号 兼子次生成成

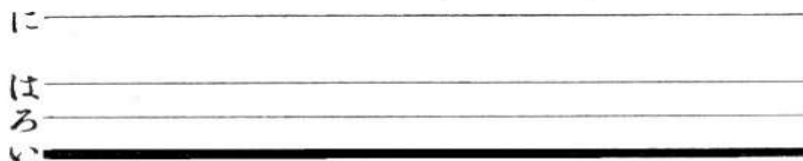


図 2-48 毛利式の符号筆記帯を示す線譜

- 1) 独立略韻：図 2-48 の筆記位置の上, 中, 下段に子音符号の一部を書いて母音を示す規則,
- 2) 同終音略韻：2 音節の言葉の末尾に出現する尾音節の母音を省く規則, 「や・は行類の独立略韻」と「同終音略韻」, 「ば・わ・ま行の同終音略韻」と「同終音略韻」, 2 音語, 3 音語, 4 音語を対象とする「略韻変体法」の規則——を設けた。

また、毛利は、言葉を表記するときに子音を省く手法として「略音法」をつくった。これは最後の音節の子音を省き、第一音節をあらかじめ決めた「書く高さ位置」(段, 階ともい

う) に符号を置いて母音を表すものとした。

さらに膠着語の特徴の1つである日本語における助詞、助動詞、動詞の省画化を体系的に行うために略語規則を設計し、基礎符号、速記文法、略語の構成を整えた。また、頻出語を対象とする自由略法を設けた。このような理論構成により、1920年、毛利式を逐語速記レベルの速記方式へと高めることに成功した。

こうした研究を毛利はすべてをひとりでやり遂げなければならなかったため、完成は1919年までかかった。毛利が訓練した速記者は貴族院速記者に採用され、戦後も参議院において複数の速記者が活躍した。また、長男高棟の弟子、穂積武子は民間の速記依頼に応じたり、教授、訓練を行った。

毛利は自分の子供にも速記を教えており、近衛秀麿に嫁した次女、泰子は、西園寺公望の秘書、原田熊雄男爵に協力して公の行動記録を速記し、のちに東京軍事裁判においてその速記記録「原田日記」(「西園寺公と政局」)が唯一の証拠として採用された。

### 3. デーゲン式

		アイウエオ	カキクケコ	サシス セソ	タチツテト		
<b>A</b>	デーゲン式 1928						
		A I U E O	KA KI KU KE KO	SA SHI SU SE SO	TA CHI TSU TE TO		
<b>B</b>	Stolze 1841						
		ナニヌネノ	ハ ヒフヘホ	マミムメモ	ヤユ ヨ	ラリルレロ	ワ
<b>A</b>							
		NA NI NU NE NO	HA HI FU HE HO	MA MI MU ME MO	YA YU YO	RA RI RU RE RO	WA
<b>B</b>							

デーゲンは「シュトルツェ・デラ・シュパダ萬国発音速記法」を参照して翻案した。

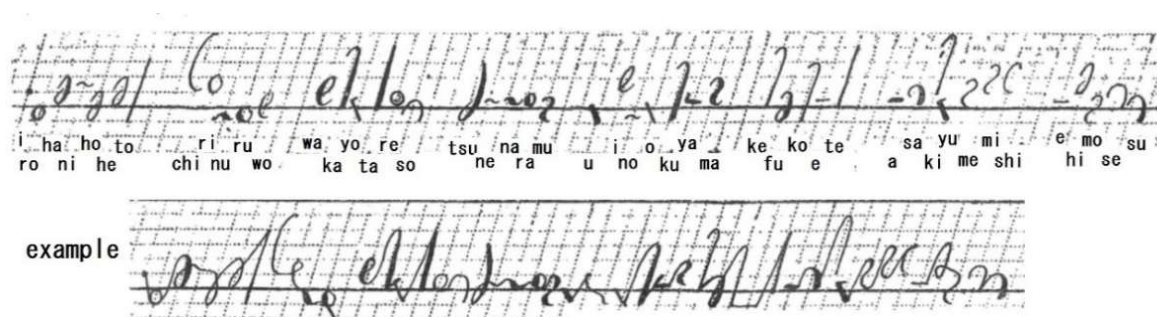
図 2-49 デーゲン式 1928 とシュトルツェ式 1841 の基礎符号

幾何派が主流であった日本の速記界において毛利式に続いて登場した草書派は、デーゲン式であった。1930年、デーゲン Joe Albert Degen によって開発されたものの普及に至らなかった。

同式は、独シュトルツェ式の「シュトルツェ・デラ・スパダ萬国発音速記法」(SS:Stolze della Spada)を日本語に適応させた草書派方式であったが、「新日本文字」と呼んだように文字改革を目指して、ローマ字使用法として組み立てた。そのねらうところは、音節一画の基礎符号(図 2-49 参照)であった。

SS 式と対比すると、デーゲン式において、カ行は〔K〕(SS 以下同)、タ行〔T〕、ナ行〔N〕、ハ行〔H〕、マ行〔M〕、ラ行〔R〕という関係が見出せる。母音は(1)ア列は中心線上に子音の尾端をつけ濃線化して表象するほか、(2)イ列は上段に淡線、ウ列は中心線上に、その尾端を小交差させて濃線化する、(3)エ列はア列と同じ位置に淡線、(4)オ列はウ列と同じ位置に淡線で、それぞれあらわすこととされた。この手法は線表象と呼ばれる。

デーゲンは、小林定正(小樽水産学校教諭)を補佐として普及を計画したが、デーゲン自身がタイや、太平洋戦争後アメリカに移住するなど、十分な態勢をとれなかったことと、日本語の文字改革を一つの狙いとしていたため定着しなかった。

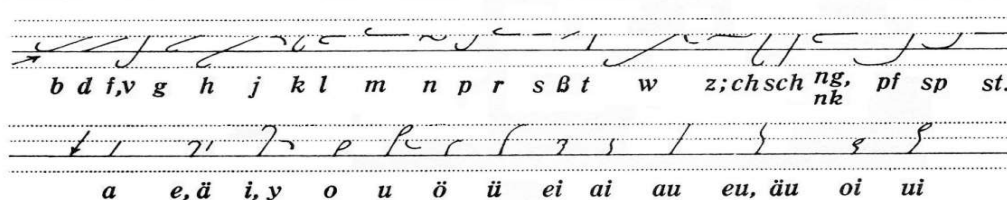


Degen system J. A. Degen 1930

図 2-50 いろは順に罫線用紙に書かれたデーゲン式の基礎符号

#### 4. 国際速記 INTERSTENNO

3 番目に登場した草書派として大場格(1905? - 没年不詳)は、1931 年、クノウスキー Felix v. Kunowski が開発した「国際速記」と呼ばれるクノウスキー式(図 2-51)を日本語へ適用した。この方式は、エスペランティストが用いており、多言語展開が図られている。その関係で、音素符号は各国語とも同種の音価を担っている点が特徴である。ちなみに、エスペランティストとして日本へ来た速記研究の外国人では、ガントレットが日本での運動を主導する役割を果たしていた。



文例図 2-51 国際速記のもととなったクノウスキー式速記法



大場は最初の版でエスペラントのラテン文字式の綴りを用いて日本語に適応しない点があったので、改良を重ね、図 2-52 に見られる基礎符号によって、最終的には他言語の体系と同じように、職業速記者用と一般人向けの内容に分けて内容を整えた。国際速記は、ドイツ語の速記だけでなく、エスペラント、英語、フランス語、イタリア語、ルーマニア語、ブルガリア語、中国語など世界 22 カ国語に対応していたのが特徴であった。大場のあとを受け

	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト	ナニヌネノ
国際速記法 1931 日本語版					
F.Kunowski 1898					
	A I U E O	KA KI KU KE KO	SA SHI SU SE SO	TA CHI TSU TE TO	NA NI NU NE NO
	a i, y u e, ä o	k	s	t	n

	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
国際速記法 1931 日本語版					
F.Kunowski 1898					
	HA HI FU HE HO	MA MI MU ME MO	YA YU YO	RA RI RU RE RO	WA
	h	m	j	r	w

上欄の日本語版は「INTERSTENO」名で大場格が日本語に適用し、深堀義文が編集した版を用いた。下欄は、Moser-Erbash共著、Lebendige Kurzschriftgeschichteに収録されている Nationalstenographie (1898)、Felix Kunowskiの符号を用いた。兼子次生整理

図 2-52 大場格設定の日本語用音節符号とクノウスキー式の子音符号 兼子次生整理

で、深堀義文は国際速記の普及活動を長年続けたが、21 世紀初期に後継者がなくなり、消滅した。深堀は尺八の楽譜を作成する速記法を考案するなど、長崎市を拠点に地道に活動した。深堀は九州大学でエスペラントを学習し、大場から国際速記を学んで、高校の数学教員をする傍ら石村式も学習したが、晩年大場のエスペラント教本を用いて普及活動を続けていた。図 2-53 は、国際速記教本を作成する際に利用した大場の文例を紹介したもの。

なお、ドイツのアーヘン工科大学教授の B. ノイバウアー博士は、エスペラントに加えて学術分野の補助語インターリングアを操っているが、詳細は不明である。ノイバウアーは 2007 年のインテルステノプラハコンgresの多言語速記競技で 17 言語の速記を書いて最高記録を達成した。

若く明るい歌声に 雪崩は消える 花も咲く 青い山脈 雪割桜 空のはて  
 今日もわれらの 夢を呼ぶ 父も夢見た 母も見た 旅路のはてのそのはての  
 青い山脈 みどりの谷へ 旅をゆく 若いわれらに 鐘が鳴る (西条八十)

図 2-53 国際速記法による「青い山脈」歌詞の文例

出典：「インテルステノ国際速記入門」深堀義文編集から 2000.10.10

5. 顔式 85 日本語斜体速記法

アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	
			
タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ	
			
マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
			

図 2-54 「日本語斜体速記」 1985, 顔廷超,  
下段の符号は第二符号

熊崎健一郎が1909年に「支那語速記術」を創案したことを知った、清国政府が資政院開設に伴い発言記録作成のために速記を採用する方針を決めて熊崎に協力を要請したことがあった。続いて田鎖綱紀が中国語の速記を考案するなど話題になった。清国政府では1896年、蔡錫勇が新文字として考案した「傳音快字」のあることがわかり、次男、璋に命じて中国速記学を創案させ、議会の発言記録の作成に当たらせた。

一方、日中戦争後、ソ連から国家統一式のGESSが中国へ伝わり、黒竜江省の顔廷超がそれを参照して中国語の草書派方式を考案した。在学していた満州建国大学において西川伍作から田鎖式を学んでいた顔は、朝鮮自治区の嚴世亮と共同で朝鮮語速記を1955年に開発しており、1985年には同じく草書派の日本語速記法「顔式85日本語斜体速記」(図2-54)を創案した。

## 6. EPSEMS

21 世紀に入って、4 番目の草書派が平野明人によって創案された。平野は早稲田式、中根式、石村式、モリタ式とみずから開発した示唆式の 5 方式を独習して日本速記協会の検定試験一級に合格した技能を持ち、速記符号の比較研究を行ってきたが、2002 年～2009 年にかけて草書派理論に基づく中速度速記法を EPSEMS（エプセムス）と命名して公にした。



図 2-55 日英両用 EPSEMS 式速記法の基礎  
符号(日本語用)

2009 年に発表したのは、日本語と英語を筆記できる個人用途版である。開発のねらいを学習量が少ないこと、書きやすいこと、判読が難しい符号を避ける点に置いて、草書派の体系を採用した。草書派を志向する中で、筆記上の調和がとれることを前提として正円幾何派、半草書派（楕円派）で用いられる画線種を採り入れる折衷コンセプトとした。

図 2-55 に示す EPSEMS の基礎符号は音素単位で筆記する方針をとった。膠着語、開音節語、母音優勢の日本語と屈折語、閉音節、子音優勢の英語の両方に対応するため、母音には直線を配当し、類似音別に A グループ（ /a/ と /o/ グループ）、I グループ（ /i/ と /e/ グループ）、U グループ（ /u/ グループ）に分けている。

同じグループの中では同じ形の符号を用いて 1 : 2 の長さの違いで区別する。無声音と有声音の区別は速記符号の符号末尾の形の違いで表す。日本語では字音語をサイン縮記法で処理し、またラ行音に対する縮記法を用意している。画数を減らすために、省画法、上中下段に母音を置いて子音を省く法（毛利式での略音法）、二重子音、頭音摘記法を用意した。



a	o	u	e	i	[ʌ&ɔ]	k	g
ʌ	o	u	—	—	—	ʌ	g
t	d	th=[θ&ð]		p	b	f	v
t	d	th		p	b	f	v
s	z	sh	zh=[ʒ]	ch		j=[dʒ]	
s	z	sh	zh	ch		j	
n	m	h	w	y	r	l	
n	m	h	w	y	r	l	

at on look egg it us cat cut God  
 ʌ o ŋ ɛ ɪ ʌ ʌ ʌ ʌ

top dam than path boss fact love  
 ʌ o ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ

star as shock measure chat jam  
 ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ

knit man hen wit yacht rich last  
 ʌ o ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ

full fool eat knee all cat kite a I I am  
 ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ ʌ

toy oil own aim  
 ʌ ʌ ʌ ʌ

youth new thank [ŋk] king [ŋ]  
 ʌ ʌ ʌ ʌ

图 2-56 日英两用 EPSEMS 式速記法の基礎符号 (英語用)